

特 別 講 演

日本鉄鋼業の将来の動向と技術開発の役割*

稲 山 嘉 寛**

The Future Movement and Effect of Technical Development of
Japan Iron and Steel Industry

Yoshihiro INAYAMA

技術の方々の集まりの中に、私が出て技術の講演、技術開発の必要を話してもと考え、私が普段考えている、いわば常識的な、あるいは経済的な面からみたお話をいたして責を果たしたく考えます。

周知のように、日本の鉄鋼業の発展は、私ども自身も想像しなかつたほどめざましいものがあります。のみならず戦後は“資源のない日本の鉄鋼業なんて成り立つかインドへ溶鉱炉をたてて、インドの鉱石を使つて鉄をつくり日本にもつて来ればいいではないか”といわゆる識者といわれる人々に私ども意見をされたことがありますだけに現在の発展ぶりには全く、今昔の感があります。先日亡くなられた高崎達之助さん、あるいは鮎川義介さんに何回か呼ばれて「インドで鉄鉄をつくつてもつて来たほうが、日本でつくるより安くできるのではないか」と言われ、そのたびにそうではないのだとご説明した経験をもつております。もちろんその時には、そういうことも考えられないことではないかなと、私どももお断りするのにいささか理由がはつきりしなかつたのでありますが、幸いに日本では、最近、転炉技術が取り入れられそれが大いに発展しており、いまでは冷鉄を買うことはナンセンスになつてきたのであります。いまならば高崎さんにも、鮎川さんにもはつきりお断り申し上げることができるとする次第であります。戦前は700万t、戦後は敗戦のため、約50万tまで落ち込みましたが、それは、20年前のできごとであります。それがわずか10年後には1千万tになり戦前をオーバーしたわけであります。その後の5年間は年間250万tずつふえており、その次の5年間には350万tずつふえている。39年度には4100万tに達したわけであり、40年度は横ばいでふえませんでした。これは国の政策が悪かつたのであり、鉄はもつと伸びる力をもつていたわけであり、いわゆる人工不景気によりまして横ばいとまつたわけであり、したがつて39年度の4100万tをベースにして考えるならば、かりに年間過去の350万tずつふえるとしても、今後の鉄鋼生産はたいへんな数量になることは火を見るより明らかであります。しかも経済というものは雪だるま式に必ず大きくなる。初めの5年間は年間250万t増であつたのが、基礎数字が大きくなり次の5年間には350万t増になつたわけであり、私ども、今後は当然年間450万t、あるいは500万tはふえると考えておるわけであり、ご存知のように、現在の生産を年ベースに直すと、もうすでに5800万tになつてい

る。あるいは3月、4月の計画、4月から6月の計画が新聞に出ておりましたが、各社のを集めると年間6200万tぐらいのペースで生産が予定されているわけであり、

かように発展する日本、その発展の要因は何であるかということであり、戦前、戦後においても日本の状態は変わっていないはずである。にもかかわらず、戦前にはそんなにふえなかつたのが、戦後に至りかような飛躍をしている。なぜであろうか、戦前になくて戦後に起きた何ものかがあるはずであると考えるのであります。この大きな世界環境の変化が何であるか、私なりの考えでまず2つの理由があると考えます。

1つは、戦争なき世界、平和の時代が到来したことがあげられます。全世界がそれに向かつて懸命なる努力をしている。戦争から平和へ、この平和ということは、人類がかつて数千年の歴史の間、いまだ経験しないできごとであります。もしかりに、平和が実現したと仮定すれば、世界は全くいままでの頭を変えなければならない。宗教も哲学も変わるであろう、経済政策はもちろん変わらなければならないはずであります。なぜならば、戦争というものは戦いであり競争であり、闘争であります。したがつて、他人の戦力が増すことは、自分が戦力の不足をきたしたことになるわけで、相対的な現象である。したがつて、人の幸福はわが身の不幸であり、わが身の幸福を守るためには、他人を不幸にしておいたほうがいいわけであり、したがつて、徳川時代をみると参勤交替を実施して諸大名の戦力を弱める政策をとつたわけであり当然のことであろうと考えます。

戦前においては、私どもアメリカからスクラップがほしかつたけれども売つてはくれなかつた。石油がほしい、しかし戦争するからいけないというので、重油は禁制品になつたわけである。それが世界平和の可能性が出てきた場合には、全く違つた政策が行なわれるわけであり、

昭和32年に、私、富士製鉄の永野社長と一緒に米国へ行き、日本の鉄鋼の需要が非常に伸び、そのためにどうしても原料がたりない、溶鉱炉が足りない、そこでスクラップを米国から何とか200万tもらいたく、商務省

* 昭和42年4月第73回講演大会特別講演会にて講演

** 八幡製鉄(株) 社長

を中心に米国政府と相談に行つたわけですが、そのときにいろいろ米国政府の要路の方と、いい機会だからお会いしたいということで米国大使館にご紹介を願つたのでありますが、私どももまず当時大統領の政治顧問をしていたシャーマン・アダムスにお会いした。そのときに「私どもはスクラップ輸出をお願いに来た、200万t輸出してもらいたい。しかしこれはけつして永久にはない。われわれもだんだん溶鉱炉を建てる。そして何とかスクラップを輸入しないで済むようにしたい」と話をしたら、彼は「米国のスクラップは限りあるものであり、そんなものをあてにして日本の製鉄業が成り立つはずがない。日本の鉄鋼業はもつともつと発展すべき素質のものであろう。新しい鉄鉱石を掘りなさい。そして溶鉱炉を建てなさい。もし、溶鉱炉の技術がないなら技術をお貸ししますよ。設備がないなら設備のお手助けをして機械をつくつて輸出をしてあげましょう。資材がないなら資材は差し上げますよ。お金がないならお金もお貸ししましょう。もう戦争はできません。平和の世の中がくるんです。したがつて、世界から貧乏をなくさなければいけません。日本は自由主義国家群としての、米国の有力なる友人である。日本が必要とするものがあるならば何でも私のところにいつてきてください。いかなる援助も惜しみません。」ということをつた。そしてやおら姿勢をあらためられて、「これはシャーマン・アダムス個人のことでございませぬ。米国大統領のことばとお聞きください。」というお話でございませぬ。それが今日の米国の政策として全く真実に、着実に行なわれてきたのであります。したがつて、米国は戦時中一生涯懸命になつて研究した知識の結晶である、新しい設備を惜しげもなく日本へ提供してくれた。戦争という前提であるならば、そんな優秀な設備を売るはずがないわけでありませぬ。戦争がない。平和なんだ。そのために努力している。という大きな目標にそつてわれわれに設備を提供したのだということ、これを私どもが第2次合理化計画に着手した奇縁となつたわけでありませぬ。第2次計画では6000億円以上を投資しましたがその後第3次合理化計画で9,000億円以上を投資した。その前の第1次合理化計画では約1500億円を投資したわけでありませぬ。いずれにしても、第2次合理化計画の6千数百億の投資が、今日の日本鉄鋼業の基礎をなしておるものと考えるのであります。

第2は、私は世界に機械の第2次革命の時代がきたと思つてあります。いわゆる鉄の時代、機械の時代がきた。要するに、鉄なくしてはわれわれの生活の向上はできない。またわれわれの欲望を充実することができない時代がきたわけであり、米国ではこれをアイアンエイジといつておるのであります。ただ、私が鉄の時代と主張しますとアイアンエイジという英語を日本語にただけですがおまへは横暴である。という非難がかえつてくる。うぬぼれているといつておるのであります。しかし米国ではすでにこの世界をアイアンエイジと呼んでおるのであります。つまりいままでは、農業生産、農業製品でわれわれは満足していた。米さえ、あるいは食べものさえあれば満足できたわけでありませぬ。しかしわれわれの文化はどんどん向上し、もうそれでは満足できないのです。聞くと

ころによりますと、世界の食糧全体を集めると、世界人口の胃の腑の容積を満たして、なおかつ余りがある。もうこれ以上われわれは食べものは流通さうまくいきさえすればいらぬはずでありませぬ。われわれが欲するものは文化的要求であります。ことに科学の進歩によりわれわれの衣食住のうちの、衣服までが大半は農業製品から化学製品へ変わつておるわけでありませぬ。こうなつてきますとあらゆるものをつくる場合、鉄がなければ絶対に大量につくることはできないわけでありませぬ。キャラメルをつくるのにも、機械がなければたくさんつくれない。あんなものを手で作つていたら大変であります。あるいは繊維製品も鉄に関係ないようでありませぬけれども、繊維製品を多量に作ろうと思えば機械がなければできないわけでありませぬ。機械はビニールやアルミではできません。これは鉄によらねばなりません。しかも人類はほとんど無限にふえておるわけでありませぬ。30億を突破する。そういう30億人分の欲望を満たす準備をわれわれはしなければいけないのであります。要するに機械力に頼らなければならぬ。その機械をどうやつて大量生産し、コストを安くつくるかということが、これからのわれわれの生活向上の1つの大きな手段であります。そういう意味において鉄の時代がきたといつておるわけでありませぬ。ところがかように工業国家に生れかわるということは経済の体質が非常に変化することを意味しておるわけでありませぬ。たとえば、土地の問題にいたしましても、日本はいま1100億坪あるそうでありませぬが、そのうち農業に使つておるのが200億坪、工業に使つておるのはたつた2億坪しかない。つまり工業が盛んになつて土地の立体利用が可能になるということから、いままで国土が狭いといつた日本でもあと工業を倍にするのにたつた2億坪しかいらぬわけでありませぬから、もう日本は広すぎるわけでありませぬ。2億坪ぐらゐなら、日本中をさがせばそこらにあるだらうと思つておるわけでありませぬ。また人間にしてもそうでありませぬ。われわれはいままで殻つぶしの人間が多いといつておる。だからそれをどうするかといつておる問題があつたわけでありませぬ。それがいままでは、足りない足りない、労働力不足です。わずかの間になぜそんな労働力不足になつたのかといつておるわけでありませぬ。つまり人間は消費の動物から生産の動物へ変わつてきたわけでありませぬ。われわれは現在消費する以上のものを生産するわけでありませぬ。それが生活向上になるわけでありませぬ。したがつて人間は宝になつてきたわけでありませぬ。この大きな変化平和、機械の時代、鉄の時代、この2つの環境変化に対して日本の受け入れ体制が非常によかつたといつておるわけでありませぬ。

日本の気候風土、これが第1であります。ご存知のように、インドへ行つてごらんになるとおわかりになります。もう暑くて暑くて着物なんか着てはいらぬ。欲望の起きないところに生産は起きないはずでありませぬ。ところが日本は四季もごもあつて、われわれは衣服も1つでは間に合はぬ。合い着もほしい。夏着もほしい。冬着もほしいといつておるわけでありませぬ。ほしいから働いてつくりたいと思つておるわけでありませぬ。そこにわれわれの生産がある。そういう気候風土の恵まれた国といつておるものは、工業国家としてすでに進歩した国

を除くならば、もう日本しかない。その次に朝鮮、韓国、中共、これが次ぐものであり、これはまだ未開発であるわけです。これがわれわれのあとを追って開発してくる可能性は十分気候風土の面からもあると思います。のみならず、われわれにとつて幸いなことには国内に何の資源もなかったから製鉄工場がみんな外国の資源をあてにしているために海岸立地になつていてあります。これは先見の明であつたのかどうかかわからない。狭い国でありほかに土地もないからどつちにしても外へ、つまり臨海につくつたのだらうと思うのでありますが、いまになつてみるとこれが非常に先見の明であつたわけでありまして。ことに原料の海上輸送をみてみますといままでは船がみな1万t級であつた。それがだんだん大型化して5万tになれば、簡単にいえば5分1の運賃で運べるというような状態になつてきていまは私どもオーストラリアから多量に石炭を買おう、あるいは鉱石を買おうということになつていてあります。その場合の運賃は何と北海道から北九州の八幡製鉄所へ石炭を運ぶよりはよほど安いのでありまして、天の配剤というものは、なおまた1つ日本に恵まれているわけでありまして。鉄鉱石というものは、熱い国、働きのあまりない国、鉄のつくれない国にいい鉄鉱石が沢山あるのです。これらは「日本へ日本へ」と日本の開発を待つて眠つていてあります。いままでこれらの国(たとえばオーストラリア)は、いろいろな過去の経緯で、日本を非友好国と扱つていたわけですがこれをほごすにははずいぶん骨を折りましたけれども今日ようやく友好関係ができ、いつたん友好関係が成立すると、今度はその関係がどんどん進んでまいりまして、今では資源をどんどん輸出してくれるようになっていてあります。したがつて私どもはこれからの日本が楽しみであります。それにいままではアメリカの設備を買つてきた。外国のノーハウを買つてきた、そして日本の技術の方々が一生懸命になつて、それをこなしていただいたわけでありまして今後はそうではない。日本の技術として日本の設備としてこれから設備をつくらうというときには日本でつくれる状態になつてきたわけでありまして。しかも新しい日本の技術開発がこれから行なわれていこうとしている。このように日本の鉄鋼業はいわゆるあけぼのの時代だと私は思つていてあります。

ところがそういうと悪いのでありますが、鉄鋼業の実情をよくご承知でない方々は「いや、いまに米国が輸入しなくなつてしまうのではないか、景気が悪くなるからだめではないか、アジアはドルがないからだめではないか」と、何でもだめだ、だめだをいつておられる。しかし私どもはそうではない鉄鋼輸出にしても日本はいままでは鉄そのものを輸出していたわけですからその輸出量はご存知のように世界一であります。ドイツも日本と同じように1千万tの鋼材を輸出しておりますがしかしドイツの1千万tというのは域内の輸出を含んだものでありまして、いわゆる第3国、EEC諸国以外の輸出は600万tぐらいのところであり、日本と雲泥の差であります。こ

れは私どもにとつては常識的ではありますが、実情を知らない人々は米国が一番たくさん鉄をつくつているから、これが一番輸出するのだらうとみんな思つていまして。米国はもともと自給自足の経済がモットーとしている国でありまして、私どもが鉄鋼業へ携わるようになりましてから米国の輸出が300万tを超えたことはほとんどないはずであり、英国も大体300万tから400万t近い線にとどまつていていまして。

米国では自給自足、英国は植民地貿易のための輸出がほとんど大部分であつたわけでありまして。これに対し日本はむかしは輸入に脅かされ、どうしたらベルギー、ルクセンブルグなどの鉄が入つてこないようになるかということで、日夜苦心をしていたわけでありまして、いままでは外から入つてこないで輸出するばかり、こんな国は世界にないわけでありまして。このことからおそらく今後世界の鉄鋼需要がふえるにつれていへんな勢いで日本に対する需要増加となつてあらわれてくると思うのであります。世界の先進諸国は、もうこれ以上ものをつくらうとしても労働力がないのでできない。輸出をしようと思つてもコストインフレになるというのがいまの米国、ドイツ、英国の状態であります。したがつてこれらの世界の鉄鋼需要の増加分は全部日本へ来るはずであります。これは皆さんにお約束していいと思います。しかも今後は鉄としてではなく、機械として注文がくるかもしれない。しかしいづれにしてもわれわれは幸せな商売に携わつております。どんな需要がきてもいい、何が輸出されてもいい、その輸出するために工場をつくるのは鉄であり、輸出する品物をつくる機械は鉄であります。皆さまももともとほんとうに幸福なる業界に携わつていて私も喜んでいてあります。

また、今後の見通しとしては私どもはおそらく8千万tまでは急ピッチにふえるであろうと考えています。なぜかということ、簡単であります。ドイツがわれわれの人口の半分の人口をもつて4千万t近い鉄をつくつていまして。われわれは倍の人間がいる。ドイツ程度の働き、ドイツ程度の頭でも8千万tの鉄はいまでもつくらなければならぬはずであり、もしそれをつくれないということであるならば、それは何かほかにか経済政策、あるいはまたわれわれの心がまえを含めて何か間違つた点があると思うのであります。ということは、例えば農業に余剰の労働人口があるのかかわらず、これの合理化をはかれないで、人間が足りないということであるならおかしい。農業をもつと合理化すれば、もつともつと生産ができるはずであります。

このように日本の鉄鋼業の前途は洋々たるものがあると思つていますが、そこへ鉄鋼協会を中心にすでに世界的レベルに達している技術を1社、個人というかきねにたてこもらずにほんとうに皆なで一致協力してさらに向上発展させるよう努力することができるならば、この日本のおかれた恵まれた環境のなかで、さらに発展をスピード・アップして、世界に雄飛することができる、私はひそかに考えているわけでありまして。